

宮沢賢治と言葉ー「注文の多い料理店」考

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦野, 一宏, HATANO, Kazuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000106

【論 文】

宮沢賢治と言葉 — 「注文の多い料理店」考

Кэндзи Миядзава и слово : о рассказе «Ресторан у дикого кота»

秦 野 一 宏

【論文】

宮沢賢治と言葉—「注文の多い料理店」考

秦野 一宏

1.

宮沢賢治はノンセンスな笑いが大好きだった。

『北守将軍と三人兄弟の医者』最終形では消去されるが、その初期形の冒頭にはこんな愉快的記述があった。リンパーは「ふつうの医者だったので、いつでも袖の巨きな服をごくゆっくりと着込んでみた¹⁾」。リンパーは「馬や羊の医者だったので、いつでも頭をてかてか剃ってみた」。こういった屈折した語りのノンセンスな笑いはルイス・キャロルも得意とするところで、たとえば『鏡の国のアリス』では、「雲ひとつ、見つけられなかった。／というのも空には雲がなかったから」といったとぼけた内容の文章がある。ここでは接続詞の妙と冗語が滑稽さを生み出しているわけだが、ゴーゴリの『外套』には、同種のおかしみでも、もう少し、屈折率の高いものがある。「戸口は開いていた。というのも、主婦^{おかみ}さんが魚かなんかを焼いて、ごきぶりどもの姿さえみえないほどに台所じゅう、煙をまきちらしていたからだ」。主な伝達内容は、台所は焼き魚の煙でうもうとしているというだけのことだ。ごきぶりほどの小さなものですらみえないというのは、煙の多さを強調するための補助的な言述である。しかしここで読者の印象に残るのは、煙そのものではなく、従属的な文章が生み出す這いずり回るごきぶりの姿であろう。伝えようとする内容と、実際伝わってくる内容に奇妙なずれが生じている。このようなく見当違いの細部>による一種滑稽なずれを賢治は、「注文の多い料理店」で巧みに取り込んでいる。その冒頭部分から—

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴか

／＼する鉄砲をかついで、白熊のやうな犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさ／＼したところを、こんなことを云ひながら、あるいてをりました。

「ぜんたい、こゝらの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構はないから、早くタンタアーンと、やつて見たいもんだなあ。」

「鹿の黄いろな横つ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずゐぶん痛快だらうねえ。くる／＼まはつて、それからどたつと倒れるだらうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行つてしまつたくらゐの山奥でした。

下線部をよく玩味してほしい。「専門の鉄砲打ち」の登場の仕方が少々、妙ではないだろうか。猟犬はちゃんと最初から姿を見せるのに、案内してくれている専門の鉄砲打ちはなかなか登場しない。この案内人については少しあとで、しかも、山奥を強調するためにまるでついでのように言及され、読者はそこではじめて、そうか、二人の紳士は、専門の鉄砲打ちに付き添われていたのだと気づかされる。伝達する価値があるものとして意図的に知らされたわけではない、ただ付随的に知ってしまう。「イギリスの兵隊のかたち」や「ぴか／＼する鉄砲」、「白熊のやうな犬」に比べて、案内人の鉄砲打ちの同行は、「だいぶの山奥」において必要不可欠であるにもかかわらず、ゴーゴリの煙でみえないごきぶりのように、伝達価値の低い〈細部〉として扱われるのだ。

言葉というものは、その使い方によっては視野や見方も伝える。この見当違いの細部によって作者は、二人の紳士が案内人を軽く見ていることを感じさせる。と同時に、案内人の影を薄くし、「イギリスの兵隊のかたち」や「ぴか／＼する鉄砲」、「白熊のやうな犬」の〈華やかさ〉を前面に押し出すことによって、紳士たちの狩の象徴的意義を強調する。紳士たちの狩猟の目的は、自己の勇壮な姿に陶醉するところにあり、彼らにとってじみな案内人は、いわば必要なく余計者〉であった。

案内人へのついで^①の言及の意味はそれだけではない。案内人は本来、余計な者であるはずはない。見知らぬ山奥で案内人がいなくなれば、狩ができないばかりではなく、道に迷ってしまう可能性がある。ことはきわめて重大なのだ。しかしながら「案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行つてしまつたくらゐの山奥」などと、さらりと表現されてしまうと、二人の置かれた事態の深刻さがまるで伝わらない。その文章は一見すると、欧文を習いはじめたばかりの子どもの作文かと思えるほどに稚拙に見える。欧文の主節と従属節にふなれな生徒の、ぎこちない訳語みたいだ。どうやらこの稚拙さは、独りよがりの紳士たちの幼児っぽさと関係しているらしい。彼らの頭の中にあるのは、鳥も獣もないこちらの山は怪しからんという手前かってな不満と、ただただ早く大物を仕留めたいという願望だけで、ほかのことなど二の次なのである。二人は、自分たちの遭遇した事態が深刻だなんてまったく思っていない。作者は、そのことを直接、説明するのではなく、戦略的に言葉を工夫し、読者を二人の紳士の心中に同期させ、読者自身が紳士になったかのように、彼らの思いを感じさせる。稚拙と見えた文章だが、そこにはじつは、高等なテクニックが駆使されていたのである。

読者が引つ掛かりを覚えるおかしな表現はほかにもある。たとえば「だいぶの山奥」。「だいぶ山奥の、木の葉のかき／＼したとこ」というのはすんなりくるが、「だいぶ山奥の」が「だいぶの山奥」と形を変えると、どうにも奇妙な感がいなめない。とはいえ、＜深い深い山の中＞のような当たり前の表現にすると、これもまたヘンである。

ここではどれくらい深い山奥であるかを伝達することが第一義であり、それ以外はまるでついで^②の情報みたいな扱いを受けている。ふつうこの内容を文章化しようとするならば、＜とんだ山奥まで来てしまったので、猟師も迷い、道を探そうとしてどこかへ消えてしまいました＞、一せいぜいがこんなところだろう。あるいは山奥を被修飾語にするにしても、＜案内人である専門の鉄砲打ちも、まごつくほどの山奥＞ぐらいのところだろう。しかし、案内人は、まごついただけでなく、実際にどこかへ行つてしまつているのである。常識的に、専門の鉄砲打ちなら、自分が迷子になるよう

な場所に、客を案内するなどということはありえない。万が一、まごついたとしても、客に何も告げずにいきなり姿を消すことはないだろう。しかしそんなありえないことが起きるのが「だいぶの山奥」なのだ。つまりは、「だいぶ」という言葉の反復によって俄かにイディオム化した「だいぶの山奥」は、案内人も消える特別な山奥、現実にはありえない異空間という特異な意味を担うことになる。

「だいぶの山奥」は「あんまり」「物凄いい」ので、もう何でも起こりうる。案内人が行方不明になっただけでなく、紳士たちが連れてきた犬までもがめまいを起こし、泡を吐いて死んでしまう。客観的に見れば、ぶきみな恐ろしい事態である。しかし、二人の紳士はそのぶきみさをまるで感じない。ぶきみであるのにぶきみと感じない、この感性の鈍さが二人の紳士の性格を浮彫りにする。彼らに感情そのものがないわけではない。飼犬の死に直面して「くやしさう」な表情を浮かべたり、「顔いろを悪く」したりもするのだが、これはしかしながら、世の愛犬家が、愛犬の死に際して味わうどうしようもない辛さとは無縁の、損得勘定に由来するものであった。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちよつとかへしてみて言ひました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしさうに、あたまをまげて言ひました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、ちつと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云ひました。

「ぼくはもう戻らうとおもふ。」

「さあ、ぼくもちやうど寒くはなつたし腹は空いてきたし戻らうとおもふ。」

二人の紳士を区別することはなかなか難しい。「はじめの紳士」だの「もひとりの紳士」だのと言われても、よくわからない。なにやらこんがらがってくる。あとになると、そのこんがらがりようは度を増し、時には二人が何か一体化しているような雰囲気も出てくる。たとえば彼らが入った「西

洋料理店」の廊下では、「早くどこか室の中にはいりたいもんだな」と一人の紳士が語りかけると、もう一人の紳士は「そしてテーブルに座りたいもんだな」と付けてくる。「そして～もんだな」と継ぐところなど、まるで一人の人間のせりふを分けあって語っているかのようだ。そうになると、どちらが「はじめの紳士」で、どちらが「もひとりの紳士」なのか、考えることすらばからしくなる。物語の最後の方でも、二人の顔はともに「くしやくしやの紙くづのやうに」なる。ともに「くしやくしやの紙くづ」のようだとされるからには、二人を区別しうる表情の違いもないわけだ。なにかから何まで、二人にはまるっきり違いがないように見える。

あるいは『鏡の国のアリス』のトウィードルダムとトウィードルディーという瓜二つの兄弟が下敷きにされているのか。奥山文幸は、トウィードルダムとトウィードルディーの「ダムとディーの部分に最も反応した結果として童話「注文の多い料理店」がある」と考えた²⁾。さもありませんが、ただ、トウィードルダムとトウィードルディーはいかにその名が酷似してしようと、彼らにはともかくもれっきとした名前があった。ところが、二人の紳士は、『外套』の「有力な人物」のように、弁別する表徴としての名前すら剥ぎとられている。それこそ、「はじめの紳士」は二千四百円の損害をした紳士と、「もひとりの紳士」は二千八百円の損害をした紳士とでも言い換えて、ようやくその差異が現れるというものだ。そしてその差異すらも、実際のところ、ほんとうの差異であるのかどうか。

二千四百円の損害の紳士は、二千八百円の損害の紳士とは違い、犬のまぶたをかえすという独自の行動をする。関口安義はこの行動に触れ、次のように述べている。「はじめの紳士が多少、行動的といっても、犬が死んだとき、そのまぶたをちょっとかえしてみるほどのものだ³⁾」。しかし、ここでの犬のまぶたを「ちよつとかへ」す行為は、その差異の微妙さを強調するだけのものではない。いくら＜行動的＞であるからといって、ふつうの人間は愛する飼犬の死に際して、まぶたをかえしてみたりはしない。それは、死の事実に動揺することがない者が、死を確認するために行う第三者的行為である。「はじめの紳士」は、臨終を告げる医者のように、死を冷静かつ客観的に確かめたただけだ。そして死の確認後、口を衝いて出てくる言

葉は、「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」である。そして「もひとり」も、犬のまぶたをかえす行為をなじることもなく、即座に「ぼくは二千八百円の損害だ」と返している。つまりは、「もひとり」も、尋常ならざる相手の行為に無反応であることによって、同じ行為をしたと同然なのだ。

問題は非情さだけにあるのではない。語り手は、二人の紳士の内面をまったく説明しようとはしないが、「もひとりの」紳士が「くやしきう」なのは「二千八百円の損害」があったということで理解できる。しかし、「もひとり」が、「ぼくは二千八百円の損害だ」と言うと、「はじめの紳士」はなぜか、「すこし顔いろを悪くして、ちつと、もひとりの紳士の、顔つきを見る。これはどういうことなのか。清水正は、「さすがに能天気な都会の若者であるといえども、何か不思議な不気味なものをそれなりに感知したのではなかろうか⁴⁾」と、好意的に解釈するが、しかしそれでは、二人の紳士の能天気ぶりを低く見積もりすぎることになりやしないか。二人の紳士は犬の死にざまなどではなく、ほかのことに気をとられているのだ。はじめの紳士は「ぼくはじつに、二千四百円の損害だ」と損害を強調する。すると「もひとり」は「くやしきうにあたまをまげ」はするけれど、あっさり、「二千八百円の損害だ」と言う。四百円分、損害額が多いのだから、もっとそのことを主張してもよさそうなものだが、あえてそうはしないのだ。問題は四百円の差の受けとり方にある(ちなみにこの差額は相当なもので、当時の童話集『注文の多い料理店』の定価の 250 倍に相当する)。はじめの紳士は、もう一人の損害が自分より四百円も多かったから、「すこし顔いろを悪くして、ちつと、もひとりの紳士の、顔つきを見る」たのだ。自分の犬は相手の犬に価格で負けている、という口には出せない、嫉妬のからんだ思いがそこにはある。そう考えると、「もひとり」が「くやしきうに、あたまをまげて言」ったことの意味も変わってくる。二千八百円の損害が悔しいことには違いないが、腹の内では自分の犬の方が四百円高いと知って、ちょっと鼻が高かったのではないか。あるいは、口には出さなくとも、互いに自分の方が、ちょっと格の高い紳士と思っているのかもしれない。しかし傍から見ると、どっちもどっちだ。連れている犬の値段は違っていない、競い合い、差異を見せつけたいと思う二人の内面は、似たり寄ったり

なのである。ちょっと違っていると思いたいが、まるで違わない二人。この物語の中で<二>は互いの差異を現すためのものではなく、同種のもので複数あることを示している⁵⁾。

二人の紳士とは違い、語り手は二千四百円と二千八百円の差にまったく頓着していない。—「白熊のやうな犬が、二疋いつしよにめまひを起してしばらく吠つて、それから泡を吐いて死んでしまひました」、「あの白熊のやうな犬が二疋、扉をつきやぶつて室の中に飛び込んできました」等々。二匹の犬の扱いに差異はまったくない。しかし二人の紳士は飼犬の命に関わる一大事という時でさえ、差異なきものの差異にこだわりつづける。

二人の紳士は、「西洋料理店」の中で掛け合い漫才のような会話を繰り返すのだが、いつも気持をオープンにしているわけではないようだ。たとえば、料理店の第五の扉まで来た二人は、顔や手足に壺のクリームを塗れと「注文」されると、ともに相手の目を盗んでの個人行動に走る。クリームを塗り終えると、あろうことか、その残りを「二人ともめいめいこつそり顔を塗るふりをしながら」、食べてしまうのだ。「めいめいこつそり」というからには、ともに相手に知られたくないわけだが、しかし、ここだけどうして秘密なのだろう。ぼくは少し食べたいと思う、ぼくも少しは食べていいと思う、では食べようというふうになぜならないのだろう。育ち柄が悪く、品がまるで身につかない、成金の息子ゆえの卑しさか⁶⁾。言えば、気恥づかしい思いをするからか。彼らはこつそりと相手に隠れながら、同じことを同時にする。「四百円」をめぐる格差への大仰なこだわりを考え合わせると、彼らは実は似たもの同士であるがゆえのライバルで、内心では相手を強く意識しあっているのである。松田久子はこのこつそりクリームを食べる二人の姿を、「貴族と近づきになりたいと思ひながら、一方で、ちっとも貴族的でなくて、かわいらしい⁷⁾」と評しているが、その<かわいらしさ>の中には何か、あるかないか分からぬようなアイデンティティを求めている、切ない叫びのようなものが感じられる。

勝手な行動をとっても、違いが違いにならない。そう考えると、二人の紳士は、よく似た外面を問題にしたトウィードルダムとトウィードルディーよりも、よく似た内面を問題にした『検察官』のピョートル・イワノ

ヴィチ・ボプチンスキイとピョートル・イワーノヴィチ・ドプチンスキイに近い（彼らは互いに、ピョートル・イワーノヴィチと呼び合う）。二人はともに自身の名前に強いこだわりをもっている。ドプチンスキイは、婚前に生まれた自分の子どもに、ドプチンスキイという姓を法的正当性をもって名乗らせてほしいと、フレスタコーフに頼み込む。どうやら独身で、名前を継がせる者のいないボプチンスキイはライバル心を燃やしたのか、ペテルブルグの「えらい人たち」に、「これこれの町に、ピョートル・イワーノヴィチ・ボプチンスキイという者が暮らしております」とフレスタコーフに伝えてもらうことを願った。彼にとっては、ドプチンスキイとは違うボプチンスキイの「ボ」の一音を偉い人の耳に響かせることこそが、自身がこの世に存在している証明になるのだ。

ドプチンスキイとボプチンスキイはわれさきに、検察官がおしのびで町にやって来たと市長たちに報告しようとするのだが、互いに意識し、自分が前面に立って正確に話そうとするために、話がぎくしゃくする。そのぎくしゃくした伝わり方のおかげで、話が膨れあがって茫洋とし、すねに傷もつ市長たちの不安を増大させることになる。結果、市長たちは、中身のない、からっぽ頭のフレスタコーフを本物の検察官ととりちがえる羽目になってしまった。「注文の多い料理店」の二人の紳士の場合は、互いに強く意識し、解釈を競いあうことで、まっとうな判断が阻まれる。たとえば「注文は**ず**る**ぶ**ん**多**いでせうがどうか一々こらえて下さい」と扉に書かれていると、一人が頭の**働**くところを見せようと、「うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういふことだ」と、自身の思いついた解釈を得意げに披露する。すると、相手もよく分からぬくせに、分からないとは言えず、「さうだらう」と相槌を打つ。するとたちまち、その解釈が確定してしまう。ここにあるのは、互いに考えの違いを突き合わせる話し合いではない。あるのはAが出す解釈とその解釈に対するBの安易な自動的な承認（A、Bは入れ替え可能）だけだ。一人では不安でも、二人の考えが一致したという形をとると、なんだか安心する。二人はこのあと押しゲームによって調子よく次々と＜ハードル＞を越え、結果的に破滅への道を突き進んでゆく。

人はこれを言ってあれを言わない。二人の言った<これ>だけで判断するのではなく、言わなかった<あれ>にも目を向けるべきだ。たとえば犬の死に関して言えば、たとえ犬に愛情を感じていなかったとしても、どうしてこんなことになったのだと叫ぶ言葉ぐらいあってもよさそうなものなのに、彼らはその言葉を口にしない。

「ぼくはもう戻らうとおもふ。」

「さあ、ぼくもちやうど寒くはなつたし腹は空いてきたし戻らうとおもふ。」

彼らにとっては、自分たちが「寒く」なったことや「腹が空いてきた」ことだけが重大で、案内人がいなくなったことや犬が不思議な死に方をしたことも、金銭的損害をのぞけば、別段、関心を寄せるほどのものではないらしい。話題にされるべきものがされない、そこにあるはずの説明もない。二人の物語は、何がないのかが問題となる、いわば<欠如>を主題化した物語でもある。

「二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴか／＼する鉄砲をかついで、白熊のやうな犬を二疋つれて」歩いている。これはすでに触れた冒頭のシーンであるが、この場面での二人はどこかしら颯爽としている。しかしこの印象は、少し読み進めてゆけば、一変する。例を引こう。二人の紳士は、「だいぶの山奥」で「西洋料理店」を発見し、そこに入ってゆくが、扉には「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮がありません」と金文字で記されていた。引用はその金文字を読んだあとの場面である。

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になつてみました。その硝子戸の裏側には、金文字でかうなつてみました。

「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎といふので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたつてゐるのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

二人の紳士は冒頭から若いと記されているが、肥っていることを我々読者が知るのは、この引用部分の「ぼくらは両方兼ねてるから」というせりふにおいてである。ここまできて、なるほど、二人は肥っていたのだと、気づかされるのである。「二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴか／＼する鉄砲をかついで、白熊のやうな犬を二疋つれて……」という冒頭部分が、「二人の若い肥^つた紳士が」となっていればどうだろう。紳士たちの印象はずいぶん違っていたはずだ。

『死せる魂』の作者は、物語の冒頭では主人公チーチコフを「あまり太ってもいなければ、さほど痩せてもいない」などと紹介するが、のちに、彼はでぶでぶ太っているのだと明かす(第9章)。太っているなら、なぜ最初から太っているとはっきり言わなかったのか。それはチーチコフが、市の有力者たちの前に、不信感をいだかせない、そつのない紳士として現れるからだ。一方、太っていると知らされる時のチーチコフは、すでにして馬脚を露わしてしまった詐欺師、<申し分のない>主人公であるとは到底言えない、ただの金儲け主義者に成り下がってしまっている。事態が変わり、市の人々の印象が変われば、読者に提示される外形までもが変わってくる。「注文の多い料理店」でも、事情はそう違ったものではないだろう。少なくとも、紳士たちがともに太っているのであれば、冒頭部の「イギリスの兵隊のかたち」という表現が伝える颯爽とした姿は消し飛んでしまう。「注文の多い料理店」の作者は、二人の紳士像を動かぬものにしたくなかった。『死せる魂』と同じくここでも、物語は読者の心の中で展開される。伝達をずらし、<ついでの情報>によって修正を加えてゆくことで、作者は、変わらぬはずの二人の紳士の「かたち」を変えるのだ。

このことは、衣服を脱いでゆくというストーリーの展開とも関係している。紳士たちは結果として、身につけていたものを次々と剥ぎとられ、自慢の「かたち」を失ってゆくが、これはけっして強いられたことではない。彼ら自身が欲すること、願うことを実現しようとした結果なのである。神妙な顔をして額縁に納まっているかのような紳士たちの凜々しかった姿が、

「紳士」というくりっばな>レットルはそのままに、いつのまにやら違う「かたち」になっている。その思いがけない変化がじつにおもしろい。

2.

石原千秋は夏目漱石を解説した文章の中で、「消費者にとって、都市は広告とモノの価格として現れる⁸⁾」と述べているが、たとえば漱石の『門』の第二章を読むと、なるほどなと思わされる。ここでは、主人公の宗助が、いつもは気づかない東京を心に印象づけようと、ぶらりと町めぐりをする。まずは電車に乗ってみると、日頃気がつかなかった広告が目がとまる。「引越は容易に出来ます」という「移転会社」の「引札」や、「経済を心得る人」、「衛生に注意する人」、「火の用心を好むもの」は「瓦斯^{ガス}竈^{がま}」を使え、などと書いてある絵つきの広告を、およそ10分もかけて「三度程」読み返す。電車を降りて、本屋の前に来ると、窓ガラス越しに洋書に目がゆき、「赤や青や縞や模様の上に鮮やかに叩き込んである金文字」を眺めた。次には時計屋を覗き込み、買いたくもないのに、「価格札^{ねだん}」を読んで品物と見比べ、その安価さに驚く。蝙蝠傘屋では、柄のよい傘を見つけて、「価^ね」を聞こうとする。さらには山高帽の男から、「一銭五厘」で風船を買う⁹⁾。あるいは「注文の多い料理店」を書いた頃の賢治にも、はたまた、「注文の多い料理店」の二人の紳士にとっても東京は、宗助のように「広告とモノの価格」として印象づけられていたのかもしれない。価格と広告。時として命にも「価格」がつく。紳士たちの二匹の猟犬はモノとして二千四百円と二千八百円というように、金銭的価値に置き換えられる。誰かが猟犬としての能力や見栄えを計量化したのだらうが、一度、価格をつけられると、その価格が独り歩きし、時に、二匹を比較しうる唯一の明示的な価値となる。

広告はどうだろう。広告に関していえば、大正時代には宗助の眺めたようなものとはまったく違う、手の込んだものが多く現れていた。秋枝美保は、大正期の広告では「組織的に消費者の購買意欲をそそる商品のイメージ作りが行われるようになった」とし、「注文の多い料理店」の「数々の客よせの言葉」などに、「当時の広告のあり方のパロディ」を見る¹⁰⁾。たとえば秋枝によれば、「当軒は注文の多い料理店ですから……」という文句は、

それだけで、大正広告の特徴となる「キャッチフレーズ」になっているという¹¹⁾。「注文の多い」店というちょっと違和感のある言葉はたしかに、刺激的で、人の心を惹きつける。「引越は容易に出来ます」といった単純な情報の提供とは大違いだ。

山猫が作ったコピーは、二人の客の微妙な心理を巧みに突いてくる。たとえば西洋料理店「山猫軒」の第一の扉の裏に書かれた、「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」という言葉。この言葉は、自分たちを注文する側ととるか、注文される側ととるかで意味は異なるが、どちらにとろうと嘘ではない。この＜嘘ではない＞というのが、曲者なのだ。ブーアスティンの言葉を援用して言えば、広告がわれわれを惑わせるのは、「広告業者が嘘つきだからではなく、彼らが嘘つきでない¹²⁾」からなのである。山猫も、当料理店では東京の店を上回るおいしいサラダやフライを用意しております、などと大言壮語すれば、そんなはずはないと、さすがに能天気な紳士たちも警戒を強めたことだろう。紳士たちは、言葉に嘘の臭いを嗅ぎつけることができないから、あれこれと言葉を解釈してしまうのだ。

山猫は、自在に勧誘のテクニックを操る。なぜ肥った者と若い者が並列で挙げられ、大歓迎されるのか。ふつうならば、その不合理さに思いが至り、引き返すか、あるいは立ち止まってじっくり考えるはずだが、二人はもう「大歓迎」という言葉に反射的に反応してしまって、細かなことには頭が回らない。＜売り出し中＞には反応しない消費者が、＜大売出し＞となると、敏感に反応するようなものだ。大歓迎の大という誇張の言葉が理性を抑え込んでしまう。さらに「ことに」が損得勘定をつのらせる。「ことに」というのは広告での決め打ちの言葉で、相手を限定することで、おトク感を一挙に増大させるのだ。「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」。このコピーは、太ったあなた、若いあなた方限定でサービスさせていただきますよと、二人の紳士に甘くささやきかけてくる。「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」。もう一つ、この言葉を誘惑的なものにする「や」という仕掛けにも留意したい。この文章は、「肥った方」あるいは「若い方」か、どちらか一つでも該当すれば大歓迎されると言っ

ている。では、太っていて若いとなると、どうなるのか。「大歓迎」の度合いが二倍になる、すなわち、「両方兼ねてる」二人は奇しくもダブルの特典にめぐりあわせたことになる。

加えて、「どなたもどうかお入りください」という不特定多数への呼びかけが、功を奏している。二人の紳士からすれば、自分たちが、誰にでも当てはまる一般人から一転、限定された特別な者であることを知らされることによって、当たりくじを引きあてたかのような多幸感が生まれる。最初から「肥ったお方や若いお方」は大歓迎だとするよりも、勧誘の効果は倍増する。ひと言でいえば、他人よりちょっと得をしたい、上位にいたいというささやかな欲望が文章の読み違えを招いたのだ。自分（あるいは自分たち）だけが得をすることほど甘味なことはない。みんな平等ではなくてもいい、平等の分け前なんか少しも魅力はないと、多くの人は感じてしまうのだ。賢治の口語詩稿「火祭」には、比較するさもしい心にふれたこんな苦い言葉が記されている。「くらしが少しぐらみらくになるとか／そこらが少しぐらみきれいになるとかよりは／いまのまんまで／誰ももう手も足も出ず／おれよりもきたなく／おれよりもくるしいのなら／そっちの方がずっといゝと／何べんそれをきいたらう」。

とはいえ、比較がすべてというわけではない。いくら「大歓迎」という言葉と、一般から特殊へのすり替えが二人の心をくすぐったにせよ、それだけで、二人が誘いに乗ってくるわけではない。二人がその奇妙さ、気味の悪さを感じないのは、「大歓迎」という言葉以前に布石として、「決してご遠慮はありません」という言葉を読まされていたからだ。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言ひました。

「こいつはどうだ、やつぱり世の中はうまくできてるねえ、けふ一日なんぎしたけれど、こんどはこんないゝこともある。このうちは料理店だけれどもただでご馳走するんだぜ。」

「どうもさうらしい。決してご遠慮はありませんといふのはその意味だ。」

二人の紳士はともに、「ご遠慮はありません」とは、「たゞでご馳走する」ことを意味するのだと、手前かってに解釈した。これはもう、苦勞しらずの金持ちのお坊ちゃんのオプチズムと、品性適わぬ成金のトクすることへの執着が、頭を迷わせたとしか言いようがない。ただ腹ぺこだというのではなく、うまくゆくと、無料でご馳走にありつけるかもしれないという過大な期待が、彼らの背中をあと押しする（『検察官』で言えば、検察官の力を借りて大将になり、肩から勲章の綬をさげることができるかもしれないというさもあり、とほうもない期待が、市長を奈落に追い込む）。このような、ありえないような過大な期待をもつのは、彼らに、自分たちは特別な人間なんだという、成金ゆえの<エリート>意識があるからだ。この意識がなければ、山猫の勧誘のテクニックがいくら巧妙であったにしても、これほどまでに効果を出せなかったのではないか。

さて、勧誘について、今度は紳士たちに対する<西洋的なもの>と<東京的なもの>の果たす役割を考えてみよう。

勧誘と言えば、そもそも建物そのものが西洋的で、誘惑的であった。奥深い山の中、どっちへ行けばいいのかわからないし、お腹もすく。そんな状態でふと後ろを見ると、「立派な一軒の西洋造りの家」があり（玄関も「白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なも」のだった）、その「札」（看板）にはこう記されていた。

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

山猫からすれば、猫穴、山猫の巣（WILDCAT HOUSE）であることを明記し、訪問する者たちを西洋風に料理する「レストラン」であることをはっきりと打ち出しているわけで、紳士たちを騙しているわけではない¹³⁾。ただ「イギリスの兵隊のかたち」をした西洋かぶれの紳士たちは、おそら

くは RESTAURANT という英語の正確な意味もわからぬまま、「西洋料理店」という訳語に過敏に反応した。さらには WILDCAT HOUSE の「山猫軒」という訳語にも振り回されたにちがいない。当時、東京の上野には有名な西洋料理の店「精養軒」（明治 6 年開業）があり、東京から来た二人は「西洋料理店」で「～軒」とあれば、もうそれだけで、東京風のハイカラな料理屋だと信じてしまったのではないか。

もちろん、「西洋料理店」、「山猫軒」だけでは、二人の紳士も、「立派な」西洋料理店が山の奥深くにあることをいぶかしく思ったことだろう。「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだらう——「もちろんできるさ。看板にさう書いてあるぢやないか」。「こんなところにおかしいね」といぶかしく思い、口に出しているのに、相手はその言葉には反応しない。たとえ自身、へんだ、おかしいと感じようとも、願望と固着観念、書き言葉への奇妙な信頼によって、そのおかしいという感覚は即座に打ち消されてしまう。「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだらう——「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなかうさ」。いったい、扉が多いのは「ロシア式」などという知識をどこから仕入れてきたのだろう。最近読んだ新聞か雑誌にでも書いてあったのだろうか。いずれにしても、書かれたものから仕入れた知識であることに間違いはなさそうだ。言葉、特に書かれた言葉は、固定化しているせいか、根拠が示されなくとも一種暗示的に、事実らしく思えてくる。そして一度信じてしまうと、他のことは連鎖的に、それに合うようにみな、合理化されてゆく。

加えて、“RESTAURANT”、“WILDCAT HOUSE” という英語の表記そのものも信用度を高める。特に大きく太字で書かれた“RESTAURANT”は、最初に目に飛び込んでくるもので、心に深く刻み込まれる。英語を配した看板だけではない。紳士たちが読む扉の文字にも工夫がある。第一の扉には「金文字」で、第二の扉には「黄いろの字」で、第三の扉は「赤い字」で、それぞれコピーが記されていた。そのカラフルな色合いは、すでに触れた『門』の窓ガラス越しに見られた洋書を想い起こさせる。英語やフランス語、ドイツ語の「赤や青や縞や模様の上に鮮やかに叩き込んである金文字」は、西洋文化にかぶれた日本人の目にはじつにまぶしく映る。

東京の住人である二人もきっと、西洋風のカラフルな広告になじんでいたにちがいない。「すつかりイギリスの兵隊のかたち」をした西洋好きの紳士たちにとっては、何事においても西洋化した東京こそ、自分たちの判断の正しさを裏づけてくれる根拠となる。東京のことを考えれば、人里離れたところに料理店があっても、ふしぎではない。

「なかなかはやつてるんだ。こんな山の中で。」

「それあさうだ。見たまへ。東京の大きな料理屋だつて大通りにはすくないだらう。」

とはいえ、紳士たちは「山の中」の料理店は所詮、品のよさでは東京の店に敵うはずはないと思っていた。ところが、「お客さまがた、こゝで髪をきちんとして、それからはきものゝ泥を落してください」という扉の注意書を読むと、二人は考えを変える。どうやら、この料理店の客は無骨者ばかりでもないらしいと。それどころか、「髪をきちんとして」ほしいなどと奇態な注文をつけるのは、客層の質がかなり高いからだと思えてくる。

「これはどうも尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くびつたんだよ」

「作法の厳しい家だ。きっとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

彼らは、西洋風の自慢の〈東京〉を基準にして、「山猫軒」のヘンに見えるものをみな、合理化してしまう。加えて、成金の息子である彼らには、自分たちは本物の「偉い」紳士ではないという負い目がある。金をかけ、紳士風な「かたち」を装うことはできるけれども、紳士として守るべき礼儀作法は残念ながら、金では調達できなかった。その負い目があるから、〈想像上の〉本物の紳士、つまり「よほど偉い人たち」なら、料理を食べる前にも髪のをを梳くことがあたりまえになっているかもしれないなどと、大まじめに考えてしまうのだ。

常識的に考えれば、料理店側から「こゝで髪をきちんとして」ほしいな

どと、客にわけのわからぬ注文するなんてありえない。紳士たちはこの、まさにもありえないことに直面させられ、奇異な解釈にしがみつく。語るに落ちるといふ言葉があるが、読者はそのとくとくと語られる〈解釈〉を通して、ふだんなら隠されているような彼等の本音を聞き取ることができる。ありえないような異常な事態は、紳士たちをある面で身構えさせるが、ある面では、彼らの心の構えをいっきょに取り除いてしまう。彼らは、りっぱな「イギリスの兵隊の」衣服を脱ぐだけでなく、心のくりっぱな衣服も自らすすんで脱いでゆく。読者は彼らのぶかっこうなリアルな姿を笑うけれども、笑われる彼らは真剣なのだ。

「だいぶの山奥」では、わけもなく犬が泡を吹いて死んだかと思うと、その死んだ犬が生き返ったりする。賢治の異世界は、どんなことでも起こりうる何でもありの奇妙な世界ではあるが、内面のリアリティがないということではない。こういうとんでもない状況にあったら、こう感じるはずだ、という心理のレベルでは、徹底的にリアリティが追求されている。このあたりはキャロル好みの〈ノンセンス〉とは趣を異にする。たとえば第六の扉の言葉を取りあげてみよう。

「料理はもうすぐできます。／十五分とお待たせはいたしません。／すぐたべられます。／早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。」

周知の通り、「たべられる」の「られる」は可能と受身の両方の意味を含んでいる。その後者の意味に気づいた時、紳士たちは恐怖に慄く。—こうした展開は、トウィードルディーが暗唱する「セイウチと大工」という残酷な詩とよく似ている¹⁴⁾。一見やさしいセイウチと、まったく冷たい大工。彼らはカキを、愉快的な散歩をしようと言って連れ出しておいて、最後はみんな食べてしまうが、その時のセイウチの裏切りの言葉はこうだ。「さあ親愛なるカキ君たちよ、きみたちの準備がよければ、ぼくたちは食事を始めることができるんだ」。それに対して、カキたちはちょっと青ざめながら、こう答える。「でも、ぼくたちを食べるわけじゃないでしょうね! (…)

んなに親切してくれたのに／それはなんとも悲しいことだ！」。ここでは feed の二義性（「食事をする」と「～を食べる feed on」）におかしみがある。「ぼくたちが (we)」食べるのか、それとも「ぼくたちを (us)」食べるのか。そのおかしみは、「注文の多い料理店」の「たべられる」と同じく、食べる (feed) という言葉の解釈の差から生じる。

ただ、紳士たちとカキたちでは、置かれた状況がまったく違う。カキたちは、最初からペテンにかけられたのだ。カキたちはただ、散歩をし、語りを楽しむために出て来たわけで、罪はない。彼らは完全にだまされたのだ。なぜカキは食べられる羽目になったのか、というようなカキの非をあげつらう問いかけは、意味をなさない。読者は“feed”に込められた二重の意味を存分に愉しめばいい。一方、賢治の紳士たちは、一方的にだまされたというわけではない。店主の山猫はセイウチや大工とは違って、白々しい嘘はついていない。紳士たちが山猫用の料理に仕立てられてゆくのは、すでに述べたように、少しでもトクをしたいという消費者の心理だとか、成金のエリート意識、西洋かぶれ、東京心酔、貴族への憧れと負い目に表れるような、紳士たちの〈心の風景〉が深く関わっている。可能と受身の両方を含みもつ「たべられる」という言葉だが、賢治の読者はその〈二重性〉を笑うだけではなく、味わいもするのである。

3.

二人の紳士は東京からやってきて、猟の前日に一泊している。一彼らが東京から来たことは、最後にわかることである。途中で東京の話題もしていたので、東京から来たのかなとうすうす感じることはできるが、そのあたりを語り手はまったく説明しない。ここでも、重要なことは、ついでの情報として伝えられるのである。

昨日泊まった宿屋では山鳥や兎が売られていた。それらを仕留めたのは、きっと案内人をした専門の猟師か、その仲間であろう。彼らは生活のために、宿屋に獲物を売るか、あるいは宿屋に手数料を払って売ってもらっている。獲物を宿屋が扱っているのはもちろん、都会からきて宿泊する富裕層のハンターに需要があるからで、二人の紳士はそうしたハンターたちの

ワン・オブ・ゼムなのだ。ハンターたちには二つの楽しみがある。一つは鳥や獣を「タンタアーンと、や」って爽快になることで、もう一つは、仕留めた獲物をお土産として持ち帰ることである。殺す動物たちは、大きく獰猛であればあるほど、その価値が高くなり、ハンターとしての名声も上がる。ただ、獲物はいつも手に入るとは限らない。ハンティングを楽しもうとやってきたはいいが、空振りに終わる者たちも現れるだろう。そうした者たちをあてこんで、宿屋では偽物の獲物が売られているのである。ここでの専門の猟師は、東京からきたハンターたちを出迎え、〈娯楽場〉に案内し、満足させて、快く送り出すという地方のレジャー・システムの中にきっちりと組み込まれている。

実際、「山猫軒」を見つける前、手ぶらで戻ることをよぎなくされた二人の紳士は、偽物の獲物についてこんなふう語っていた。

「なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいゝ。」

「兎もでてみたねえ。さうすれば結局おんなじこつた。」

こうした「結局おんなじこつた」というハンターたちの意識が、専門の猟師や宿屋の商売を成立させているのだ。事実、獲物に恵まれなかった二人は帰りに、宿屋でそれぞれ十円の山鳥を買った。小森陽一はこの紳士たちの行為を評して、「生き物の死骸を商品としてお金で買って食べようとする、『都会文明と放恣な階級』の、あからさまな姿があらわれている¹⁵⁾」と指摘しているが、では、「生き物の死骸を商品としてお金で」売ろうとする〈地方人〉はどうなんだろう。ここでは死骸を売ったり買ったりする、そのこと自体が問題になっているのではない。第一、紳士たちの目的は、山鳥を食べることにはない。もし彼らがしとめた獲物が鹿であったら、「二三発お見舞」した相手が「くる／＼まはつて、それからどたつと倒れる姿を堪能したあとは、きっと角だけを分離するはずだ。殺した動物たち（あるいはその一部）は記念の〈トロフィー〉として持ち帰られ、今度は新たな楽しみとして別の役割を負わされることになる。それは、彼らが作り上げた「イギリスの兵隊のかたち」と同じく、見せるものなのだ。二人

が架空の話のをだれに披露するのかわからないが、当然、自分がそれを「タンタアーン」と仕留めた場面を身ぶりよろしく、事細かく〈再現〉してみせるのだろう。こうして実際のハンティングと〈話〉としてのハンティングは、金銭を介して「結局おんなじ」気晴らしになる。それはとりもなおさず、気晴らしのようなモノではないものも、金銭によって取得可能であるということである。兎の値段は示されていないけれど、ハンターは、自身の懐具合と趣味に合わせて、山鳥の話と兎の話のいずれかを選択することすらできるのだ。

紳士たちの第一の目的がハンティングによる〈気晴らし〉にあるとすれば、山猫の最大の目的はなんだろう。牛山恵は「山猫は二人の紳士を狩るために罠を仕掛けた」と指摘している¹⁶が、まさに「狩る」ことが山猫の目的だったのではないか。二人を食べること、あるいはおいしく食べることが第一の目的であれば、「注文」の言葉を計13回も別々の扉の表裏に記すなど、手が込みすぎている。しかも第六の扉の裏にはこう書かれてあった。「いろいろ注文が多くてうるさかつたでせう。お気の毒でした」。この言葉を、子分の一人はこう評している。「親分の書きやうがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかつたでせう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ」。「間抜けたこと」を書いてしまったのには、わけがある。山猫は子分に、どうだとばかり、自身の〈狩猟〉の腕を見せつけながら、ハンティングを娯楽として楽しんでいる。「間抜けたこと」を書いてしまったのは、詰めがしっかりしていなかったからだが、それは、〈二匹〉の獲物が手中にあるという気の緩み、してやったりという満足感の表れでもあった。

ただ細かいことだが、牛山のように、「狩る」ために「罠を仕掛けた」のだと言われると、引っ掛かりをおぼえる¹⁷。狩りでは、結果さえ得られれば、何をしても許されるわけではない。もしも「罠」という語に、〈相手を騙してはかりごとを行なう〉という意を担わせるならば、これは違う。牛山はまた、山猫は「鉄砲で殺すなどという野蛮な方法を用いず、紳士たちが自ら自分を調理するように言葉の仕掛けを設け」たとも述べている¹⁸が、この「野蛮な方法」という表現にも引っ掛かる。鉄砲は用いないにし

でも、食べようとして大きな口を開けて待っているのは、鉄砲で仕留めるのと同じくらい野蛮ではないだろうか。ここで最も大事なものは、フェアに戦うというスポーツマン精神だ。狩猟では「獲物となる動物は自由で、人間の攻撃から逃げるのが（そして反撃も）できなくてはならない。（…）致命傷を与える暴力は直接的に行なわれなくてはならず、罠などによって仲介されてはならない¹⁹⁾」。この狩猟のスポーツマン精神に則って、山猫は絶対に嘘をつかず、「言葉の仕掛け」だけで二人をおびき寄せる。

<ハンティング>に参加しているのは親分だけではない。勢子のように、あるいは猟犬が吠えながら獲物を追い込むように、山猫の子分たちは、「早くいらつしやい。いらつしやい」と、二人の紳士を親分のもとへと呼び込む。ハンターなら、最後は「タンタアーン」という銃撃で終わるが、こちららは親分の大きく開けた口に飛び込んで、ジ・エンドである。

田近洵一が指摘するように、山猫は、「決して賢治が交歓し、融合し、同化したいと願った自然」ではない²⁰⁾。その構図は、文明（二人の紳士）対自然（山猫）というような単純な図式で捉えきれものではない。では山猫の世界と紳士の関係はどう捉えればよいのか。中村三春は「理法の異なる」パラレル・ワールドの接触にこの物語の構造を見てとった²¹⁾。たしかに、山猫の生きる領域と紳士たちの生きる領域は、平行の関係にあると言えようが、問題は、両者の「理法」がまったく異なると言い切れるかどうかだ。「よだかの星」の星の世界や「どんぐりと山猫」の山猫の生きる世界を考えてみればいい。前者のある星は、星になりたいというよだかの言葉にこう答えていた。「いいや、とてとても、話にも何にもならん。星になるには、それ相応の身分でなくちゃいかん。又よほど金もいるのだ」。地獄の沙汰も金次第というが、これはまさに星の世界の<理法>も、こちら側の世間とそう変わらないことを示している。「どんぐりと山猫」の山猫のように、威厳ある者として演じているその姿は、こちらの世界でも日常的に目にすることができる。

「注文の多い料理店」の山猫も、ただ人間を食べることが目的なら、当人たちに酔を振りかけさせたり、クリームや塩をすりこませたりするなんてしち面倒くさいことをしなくてもいい。まずは武装解除させ、そのあと

一撃で殺してしまったほうが、料理は簡単にできるだろう。しかし山猫はあえて、その方法をとらないのだ。山猫も言葉で獲物を誘導しながら（コピーを考案したのは自分ではなく親分自身であることに注意しよう）、食べる前のそのプロセス、おびきよせるプロセスを愉しんでいる。

山猫が考案した「扉」の言葉の積み重ねは、じつに巧妙である。すでに触れたが、第三の扉にはこう記されていた。「お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それからきものゝ泥を落してください」。髪をきちんとして、きものの泥を落とすというのは、たしかに礼儀作法に適っている²²⁾。しかし、客として入る料理店でそんな作法を要求されるというのは、やはりヘンだ。この〈ヘン〉を合理化するために二人の紳士は、なるほど、「よほど偉い人たちが、たびたび来る」ので「作法がきびしい」のだなど考える。とてつもなく偉い人たちの感情を害さぬために、店側が忖度したというわけだ。ところがふと思いついた「よほど偉い人たち」が、〈頭の中に居座る永遠の釘²³⁾〉となって、もう頭から離れない。板の上のブラシが「ぼうつとかすんで」なくなるような超常現象が目の前で起きてても、〈釘〉のおかげで、彼らはその現象の前で踏みとどまることなく、ただびっくりするだけでやりすごしてしまう。

偉い人と関係づけると、すべてのことはありうることになる。同じ扉の裏側には、「鉄砲と弾丸をこゝへ置いてください」とあったが、紳士たちは、この店には「よほど偉いひとが始終来てゐるんだ」と、よほど偉い人の来店の頻度を「たびたび」から「始終」へと変更することで納得する。するとさらに黒い扉（第四の扉）があって、そこには、「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい」と記されている。「どうだ、とるか」—「仕方ない、とろう。たしかによほどえらいひとなんだ。奥に来てゐるのは」。「仕方ない」が実に効いている。帽子と外套だけでなく、西洋料理店なのに、靴を脱ぐという奇妙さ。それでも「仕方ない」のだ。下々の常識のうえに、下々の及ばぬ〈えらい人〉のルールがあると、二人は思い込んでいるのだ。

彼らはふしぎなく物語を、この場に適合するように、少しずつ書き変えてゆく。帽子と外套をとるのは礼儀に適っている。しかしそこに、靴も脱いでくれとなるとどうか。靴の泥を落とせというならまだしも、靴を脱

ぐなんて、量敷きでない西洋料理店ではまずありえないことだろう。二人の紳士は、こんなにも作法が異例できびしいのは、よほど偉い人が今、「奥に来てゐる」からだと解釈する。「始終来てゐる」だけでなく、今、まさに奥に居ると想像がエスカレートすると、そこからはもう、理性は正常に作動しなくなる。どんなヘンなことでもヘンでなくなる。こうして第五の扉の突拍子もない言葉を受け入れる準備が整った。この扉にはこう書かれていた。「壺の中のクリームを顔や手足にすつかり塗ってください」。こんな珍妙な要求を受け入れるのは、ふつうならばありえないことだが、一人の紳士は、その言葉の意味をこんなふうに見事に解釈してみせた。

「これはね、外がひじやうに寒いだらう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきてゐる。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

外の冷えて血流が悪くなった肌が、部屋のあまりの暖かさに乾燥し、角質が固まるといふのだが、そんな大仰な気遣いをされるような人物はもう「貴族」しかないといふのだ。こんな素っ頓狂な解釈を思いつくのも、日頃から、「貴族」と面識をもちたいものと強く願っていたからにほかならない。いつも思い描いていた貴族と今、ここで親しくなれると想像すると、もう天にもものぼるような思いだったにちがいない。実際、成金の息子である彼らは貴族に憧れて、貴族の特権的な行為であったスポーツハンティングを嗜むようになったのだから²⁴⁾。彼らは奇妙とも思わず、わくわくしながら、指示通りにクリームを顔、手、足に塗る。ひびきれを心配しながら、なんだかもう、自分もいっぱしの貴族になったような気分を味わっていたのではないか。

最初に、あとでクリームを塗ってもらうことになりますと予告されていれば、さすがに二人の紳士の奔放な想像力も、「貴族」にまでたどりつかなかっただろう。「注文」の言葉の積み重ねがきわめて重要なのだ。ひとつひとつ順序を追うことで山猫の言葉は、紳士たちの密かな願望までもあぶり

です。

4.

「注文の多い料理店」には、紳士たちの想像力を掻き立てる工夫が、いたるところに仕掛けられている。紳士たちをおびき入れる山猫やその子分の扱いに関しても例外ではない。

この物語の山猫は、「どんぐりと山猫」の山猫とはまるでちがった扱われ方をしている。「どんぐりと山猫」では、山猫は裁判官として、黄色い陣羽織を着た姿をはっきりと読者の前にさらす。それに対して、「だいぶの山奥」の西洋料理店の店主、広告ちらしの言葉を使えば「途方もない経営者」である山猫は、最初から最後まで、その姿を見せることはない。いくらおどろおどろしい姿で現れようと、それがもたらす恐怖は、想像力を巻き込んだ姿なき姿には到底かなわない。幽霊が怖いのは、見えない相手の気配を肌で感じるからだ。山猫は紳士たちを食すことを目論んでいる、滑稽ではあるが、恐ろしい存在である。その<恐ろしさ>を賢治は、説明するのではなく、「扉の向ふのまつくらやみ」の中にいる山猫やその子分のいる気配を示すことによって、紳士（及び読者）にその存在を感じさせようとする。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

「いや、わざわざご苦労です。

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い目玉がこつちをのぞいてゐます。

気配はまずは、鍵穴から「きよろきよろ」のぞく山猫の子分の「二つの青い目玉」によって伝えられる。この青い目玉を見ると、紳士たちは「うわあ」と叫んで、「がたがたがたがた」震える。次に「こそこそ」声が聞こえてくる。扉をはさんだ向こうから漏れ聞こえてくるのだ。その声の主た

ちは、紳士たちには聞こえないと思って「親分」の失策に言及したり、「ここへあいつらがはいつて来なかつたら、それはぼくらの責任だぜ」だとか、「どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしないんだ」などと、物騒なことも話したりしている。「経営者」ならぬ「親分」という野卑な呼び方も恐ろしいが、なによりぶきみなのは、「骨」もくれないという表現だろう。いったい誰の骨のことを言っているのだ？ それはぼくたちの骨だと思ふ、なんて悠長な意見など言えるはずもない。骨もわけてくれないというからには、骨を覆っていた肉はまっさきにすべて食べられてしまうのだ。

そうするうちにぶきみな声は、直接、紳士たちに向けられる。

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お皿も洗つてありますし、〔菜〕つ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜つ葉をうまくとりあはせて、まつ白なお皿にのせるだけです。はやくいらつしやい。」

「へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラダはお嫌ひですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげませうか。とにかくはやくいらつしやい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしやくしやの紙屑のやうになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふつつつとわらつてまた叫んでゐます。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるぢやありませんか。へい、たゞいま。ぢきもつてまゐります。さあ、早くいらつしやい。」

「早くいらつしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもつて、舌なめずりして、お客さま方を待つてゐられます。」

ナフキンにナイフ、サラダにフライ、そしてクリーム。西洋料理を思わせる言葉が並ぶが、それはもはや禍々しい響きを持つ。自分たちのことをひそひそ声では、「あいつら」と呼んでいたのに、ここでは打って変わって

「あなたがた」、「お客様方」などとやさしく持ち上げる。その妙に上っ面だけの丁寧な表現と、「菜つ葉をうまくとりあわせて、まつ白なお皿にのせるだけです」だとか、「舌なめずりして」というリアルすぎる表現の結合する気味悪さ。どうやら山猫はすぐそばにいるらしい。「親分」が「親方」に変わったのも、親分に聞かれてもいいように、礼儀正しく言っているつもりなのだろう。まだか、遅いぞと親分が急かしたのか、「へい、たゞいま。ぢきもつてまゐります」と、子分が「親方」へ返事をする。この子分のかしこまった返事がじつに効果的だ。親分の姿は見えず、声も聞こえないけれども、扉の向こうで、二人の紳士を料理が出てくるのを今や遅しと行儀よく、「舌なめずりして」待っている気配がリアルに伝わってくる。

ただ子分たちは、親分に＜料理＞をお出しできなかった。いくら呼びかけても、紳士たちは「泣いて泣いて泣いて泣いて泣」くだけで、もはや自身で次の扉を開けようとはしないのだ。闘争心を失くし泣きじゃくる無抵抗なく獲物＞を仕留めるのは、フェアではない。泣きだしてしまえば、もうゲーム・オーバーだ。山猫の魔力も、その効力が失われ、異空間にも破れ目ができる。紳士たちが泣きじゃくっていると、「うしろからいきなり」二匹の犬が飛び込んできた。死んだはずの犬が再び登場するのは「構成上の矛盾」だとする見方がある²⁵⁾が、山猫の強力な魔力によって死んだ犬たちが、その魔力の弱まりによって生き返るといえるのは矛盾ではない。復活した犬たちは、山猫たちがいる部屋へ吸い込まれるように入っていた。すると、その「まつくらやみ」の部屋の中で、「にやあお、くわあ、ごろごろ」という声があがり、「がさがさ」鳴る音がしたかと思うと、「室はけむりのやうに消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立つてゐた」。

紳士たちは大泣きしたが、それはあくまで恐怖のために、自分たちの行動を振り返って反省しているわけではない。犬が泡を吐いて死んでしまっても、案内人が突如いなくなっても、あまり感情が動かなかった彼らだが、ここでも同じだ。二匹の犬が、生きていたとわかって、案内人が無事に戻ってきても、そのことをことさら喜んでいるふうにはみえない。

(…) 風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木

はごんごんと鳴りました

犬がふうとうなつて戻ってきました。

そしてうしろからは、

「旦那あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

二人は俄かに元気がついて

「おゝい、おゝい、ここだぞ、早く来い。」と叫びました。

簑帽子をかぶつた専門の猟師が、草をざわざわ分けてやつてきました。

そこで二人はやつと安心しました。

そして猟師のもつてきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買つて東京に帰りました。

ぶるぶる震え、泣き出すほどの強烈な恐怖の体験をしたあとも、二人の紳士はまるで変わらない。まぶたを返して死を確かめたはずのその犬が、どうして生き返ることができたのだろうと、その摩訶不思議さにも驚くこともない。戻ってきてくれた案内人の姿を見て彼らの口を衝いて出た言葉は、助けてくれという嘆願ではなく、「早く来い」という居丈高な命令であった。「猟師のもつてきた団子をたべ……」という語り手の言葉遣いからも窺い知れるように、猟師から団子をもらっても一言の礼を言うこともなく、あたりまえのようにして食べている（西洋風のサラダやフライを食べ損なって、結果、日本の団子を食べているのは、どういう気持ちなのだろうか）。せめて、〈お腹をすかしてふるえる紳士に団子を与えた〉と、猟師を主語にした文章でももってくれば、地方人の温かさも際立ち、都会人の方も悔い改めて感謝するという万事めでたしめでたしの流れになるのだが、実際には、紳士たちは団子をもらう段階ではもう安心し、ふるえてはいない。そのあと、文章は、句点で切られることもなく、「途中で十円だけ……」と、彼らが予定していた行動を記して、あっけなく終わる。「ご遠慮はありません」という言葉を「たゞでご馳走」してもらえると、都合よく読み替える二人のこただ、おそらくビジネスライクに、この猟師から受けとった団子も雇い賃の中に含まれていると見なしたにちがいない。自分たちさえ安心

できれば、彼らにはそれ以上の感情は湧いてこないのだ。案内人の獵師に対する扱いの軽さは一貫している。いや、これはもう案内人一個人への態度ではないのだろう。<かわいく>クリームをなめていた彼らではあるが、ここでは自身を憧れの偉い貴族に重ね合わせ、その偉い人の態度で、地方の者たちを睥睨してやまない。

この二人の紳士の変わらなさは、『ネフスキイ大通り』（ゴーゴリ）のピロゴーフ中尉を連想させる。ものすごい侮辱を受けて、狂気に駆られるほど怒り狂い、長官や参謀本部に訴えてやる、刑が不十分だったら国会へ、それでもだめだったら皇帝陛下にだって直訴してやるんだと息巻いていたこの男は、次の日、菓子店で軽焼き饅頭を二つ食べると、気持がおさまり、夜になると招待されていた夜会で楽しく過ごし、周りの者がうっとりするほど上手にマズルカを踊ることができた。二人の紳士も、このピロゴーフの輩と同じで、何があってもすぐにけろりと忘れることができるのだ。彼らは、予定通り、まがい物の<トロフィー>を「十円」で買って、まるで何ごともなかったかのように、東京に帰る。であればゴーゴリ風に、二人が東京の家で、山鳥を手に、ありもしない話を知人に吹いている場面が終わっても不思議はないように思える。しかし作者はそんな終わらせ方を選ばなかった。

さつきーぺん紙くづのやうになつた二人の顔だけは、東京に帰つても、お湯にはいつでも、もうもとのとほりになほりませんでした。

何があっても変わらぬ彼らにも、二度と消せない体験の痕跡が残る。「やつぱり世の中はうまくできてるねえ」と、彼らも笑って言いたいところだけれども、しわしわになった顔はどうすることもできない。

しかし、いくらなんでもありの童話だとしても、こんな結末はありそうもない。「なめとこ山の熊」では、「僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が二度とつらも見たくないやうないやなやつにうまくやられることを書いたのが実にしゃくにさわってたまらない」と、賢治は、小十郎の持ってきた熊の皮の値を買い叩くずるい荒物屋に対して、作者としての<反感

>を露わにしている。あるいは恐怖を<標本>にしたようなしわしわ顔の固定化は、「途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰る紳士たちへの同種の反感による、こうなれという願望なのかもしれない。

賢治は広告ちらしに「注文の多い料理店」についてこう記している。「糧に乏しい村の子どもらが、都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まらない反感です」。すでに触れたように、都会が「広告とモノの価格として現れる」とすれば、その「反感」の多くは作られた<外面性>にこそ向けられるのではあるまいか。その外面性の代表は顔である。「やつぱり世の中はうまくできてるねえ」と、再度、彼らに言わせたくない。賢治の想像する、紳士たちに対する村の子どもらの「反感」が、彼らの「紙くづ」のような顔を「もとのとほり」にさせないという奇態な、漫画的な結末を導いたのだらう。それは紳士たちが一番気にしていた「かたち」一わけても見せかけだけの顔一の正体を露わにすることでもあった。読者の心の中で変容しつつきてきた彼らの「かたち」は、ここではっきりと動かぬものになる。

注

- 1) 下線は筆者。以下、傍点も含めて強調はすべて筆者のもの。
- 2) 奥山文幸『宮沢賢治論 幻想への階梯』蒼丘書林、2014年、117頁。
- 3) 関口安義『賢治童話を読む』港の人、2008年、141頁。
- 4) 清水正『宮沢賢治を読む／『注文の多い料理店』をめぐって』鳥影社、1991年、90頁。
- 5) 小森陽一は、犬に四百円の価格差がついたのち、「安い値を言った紳士の方が、高い値を言った紳士に従わされていくことになる」と述べているが、これは検証できない。すでに触れたように賢治はこのあと、どっちがどっちか分からぬように、二人の紳士の差異を消している（小森陽一『最新宮沢賢治講義』朝日選書、1996年、226-227頁を参照）。
- 6) 成金については、秋枝美保が、高価な犬をもつげいたくな紳士たちの背景には、「第一次世界大戦の大戦景気によって排出した成金たちの生活ぶりがある」と指摘している（秋枝美保『北方への志向』、朝文社、1996年、300頁）。また篠田英隆は、当時の成金たちが、「これ見よがしの態度で行っていた」狩の例を具体的に示している（篠田英隆「注文の多い料理店」考 消費、読書そして食べること、（赤坂憲雄・吉田文憲編『注文の多い料理店』考』五柳書院、1995年、104頁）。
- 7) 松田久子「作品研究「注文の多い料理店」（続橋達雄編『注文の多い料理店』研究II、學藝書林、1975年、所収）、107頁。
- 8) 石原千秋編『生まれてきた以上は、生きねばならぬ 漱石珠玉の言葉』新潮社、2017

- 年、456頁。
- 9) 『門』からの引用は、夏目漱石『門』新潮文庫、1948年、に拠った。
- 10) 秋枝美保『北方への志向』、311-312頁。
- 11) 同上、312頁。
- 12) D.ブーアスティン、星野郁美・後藤和彦訳『^{イメージ}幻影の時代 マスコミが製造する事実』東京創元社、1964年、224頁。
- 13) 小森陽一『最新宮沢賢治講義』、231頁を参照。
- 14) Lewis Carroll. *Through the looking glass and what Alice found there*. Macmillan Children's Books, 1996, London, p.77. 佐々木ボグナは、この詩「セイウチと大工」の一部を自身の「注文の多い料理店」論のエピグラフとして掲げている（『宮沢賢治現実の遠近法』京都大学学術振興会、2013年、175頁）。ただ、エピグラフのあとの本論では詩への具体的言及はない。
- 15) 小森陽一『最新宮沢賢治講義』、227頁。
- 16) 牛山恵『宮沢賢治 童話の世界』富山房インターナショナル、2014年、186頁。
- 17) 二人の紳士が「みごとにわなに陥る」（田近洵一「童話『注文の多い料理店』研究」、21頁）とか、「その言葉によってワナにかかった客」（篠田英隆「注文の多い料理店」考 消費、読書そして食べること」、103頁）とか、〈畏〉という表現を用いている評者は他にもいる。
- 18) 牛山恵『宮沢賢治 童話の世界』、186頁。
- 19) M.カートミル、内田亮子訳『人はなぜ殺すのか 狩猟仮説と動物観文明史』、新曜社、1995年、45頁。
- 20) 田近洵一「童話『注文の多い料理店』研究」、「日本文学」1977年7月号、23頁。
- 21) 中村三春『修辭的モダニズム テキスト様式論の試み』ひつじ書房、2006年、58頁。
- 22) 作法は賢治のきわめて関心の高い題材である。『どんぐりと山猫』では標準語で話すことの問題を絡めて初対面の人、目上の人などと話す場合の作法が問題にされていた。これについては、拙稿「宮沢賢治と〈礼儀作法〉—『どんぐりと山猫』とめぐって」（海上保安大学校「研究報告」（人文系）第60巻第2号、2016年3月）を参照されたい。
- 23) 『検察官』の登場人物たちをめぐるゴーゴリの言葉。役者がこの「釘」をつねに忘れずにおくことが、役をうまく演じるコツだとゴーゴリは言う。
- 24) カートミルは「社交」と「狩猟」の関係について、次のように述べている。「多くのハンターは、狩猟そのものに何の関係もない社会的理由から狩猟する。狩猟が支配階級のシンボルであった時代には、社会的野心をもつ者は身分向上のためと紳士階級とお近づきになるために、狩に参加した」（M.カートミル、内田亮子訳『人はなぜ殺すのか 狩猟仮説と動物観文明史』、359頁）。
- 25) 西田直敏「宮沢賢治の文章 序—「注文の多い料理店」について—」（続橋達雄編『注文の多い料理店』研究Ⅱ、學藝書林、1975年、所収）、73頁。

※賢治作品からの引用はすべて、筑摩書房版『新校本宮沢賢治全集』に拠る（ただし、ルビに関してはこの限りではない）。